

科学（生物学）基礎論の緩やかな死

中尾 央

総合研究大学院大学

現在、基礎研究が危機に立たされている。そんな中、科学（生物学）基礎論はこのままこれまでと同様の研究が行えるだろうか。私の答えは、明らかなノーであり、このままの状態を維持するなら、科学（生物学）基礎論は緩やかな死を迎えるだけだろうと考える。

自然科学でさえ、基礎研究は研究存続のために、その研究がどういったアカデミック・インパクトやイノベーションにつながるのかを説明する必要性に迫られているのが現状である¹。人文・社会科学はさらに旗色が悪い。科学技術・学術全体に関わる基本政策や改革案（例えば第四期科学技術基本計画や国立大学法人評価委員会総会における資料など）を見ればすぐ分かるが、国の政策の中で念頭に置かれているのはほとんどが自然科学であり、特に人文科学はもはや蚊帳の外となりつつある。これは研究費や競争的資金だけに関わる問題でなく、若手のポストにも大きく関わる話である。人文・社会科学における上記のような「説明」の取り組みは、特に日本では相当に遅れている。たとえばイギリスのArts & Humanities Research Councilからは、人文・社会科学がどのようにイノベーションを行ってきたかについて詳細なレポートが発表されているが、日本の人文科学において、こうした試みは見かけたことがない。

ではどうすれば、かの「インパクト」や「イノベーション」に関連して、科学（生物学）基礎論の存在意義を説明できるのか。本発表ではこの問いに対していくつかの可能な回答を提示する。もちろん、私の回答がすべてではない。きっと他にもまだ色々な回答があるはずであり、皆さんにもそれを考えて頂き、説明の実践をして頂くこと、それが科学（生物学）基礎論の緩やかな死を回避する重要な方策だろう。

まず、科学技術イノベーションとは何か。第四期科学技術基本計画 (p. 7) によれば、「『科学技術イノベーション』とは、『科学的な発見や発明等による新たな知識を基にした知的・文化的価値の創造と、それらの知識を発展させて経済的、社会的・公共的価値の創造に結びつける革新』であるという。また、アカデミック・インパクトとは、イギリスの Research Council によると、「素晴らしい社会・経済研究が、その分野内で、そして分野を超えて、理解・方法・理論・応用における重要な進展を含む科学的な進展に対して行う、実証可能な貢献」である。この定義を見れば、本来であれば、科学（生物学）基礎論もイノベーションやさまざまなアカデミック・インパクトに結

¹ もちろん、『インパクト』や『イノベーション』なんて胡散臭い」と言いたくなる気持ちは分かる。しかし、胡散臭がって何もしないだけでは、若手や後進に大きな影響が出るのは間違いない。私は自分のエゴで後進に迷惑をかける気にはなれないし、後進のことなどどうでもよく、緩やかな死を喜んで迎えたいなら、本日の話を聞く必要はない（もしかすると、それも一つの案かもしれない）。

びつきうること、そしてその説明がさほど困難でないことはすぐ分かるだろう。

では、具体的にどのような説明が可能だろうか。以下、ごく簡単に私の考えるいくつかの候補を示す。

- (1) 余計な事を考えずに研究を頑張りたいという人からすれば、研究成果のインパクトを説明することが一番素直な方策だろう。とはいえ、日本語で論文を書き、それが科学（生物学）基礎論外・国外の人からはほとんど読まれないような状態では、到底「新たな知識を基にした知的・文化的価値の創造」などにはたどり着かないことを認識しておかねばならない。日本語で書く場合でも、科学（生物学）基礎論を超えた、広い範囲に実質的なアカデミック・インパクトをもたらさう論文、あるいは英語で書いて国内外のより多くの人に読まれる論文を書く、といった作業が必要になる。これは高いレベルの研究を行っていれば自然と達成される目標だが、実際の問題は、それが達成されていない日本国内の科学（生物学）基礎論の研究レベルなのかもしれない。
- (2) 次に、教育面でも科学（生物学）基礎論は重要な役割を果たせるかもしれない。たとえば、俯瞰的視野にたってさまざまな分野の違いを教えることは、理系・文系を問わず重要なはずである。とはいえ、現状のように蝸壺化しきった科学（生物学）基礎論の現状では、教師側でさえ俯瞰的視野を持ち得ているかどうか定かではない。さらに、（自然）科学技術の外的なインパクト、すなわち、人文・社会科学、あるいは社会・倫理・法にもたらさうる影響（あるいはその逆方向のインパクト）を教育・研究する、という点でも科学（生物学）基礎論は貢献できるだろう。もちろん、後者に関して言えば、科学の社会的側面に関心をあまり払ってこなかった国内の科学（生物学）基礎論にとって、それほど簡単な方策ではないかもしれない。しかし、理論的側面から社会的側面までに至る包括的な視点からの考察は、科学のあるべき姿を考えるはずの科学（生物学）基礎論にとっても、本来必須の作業になるはずである。また、包括的な視点からこうした作業が行われれば、インパクトやイノベーションといった胡散臭い指標に代わる、より良い指標が提示できるかもしれない。

以上の提案を見て、「何だ、こんな当たり前のことをいまさら」と思われたかもしれない。だとすれば、科学（生物学）基礎論の将来は安泰である。だが、どうにも上記のような「当たり前」の話さえおぼつかないのが日本の科学（生物学）基礎論の現状のように思えて仕方がない。それが、私の危惧であり、科学（生物学）基礎論の緩やかな死を懸念する理由である。